

冷戦初期アメリカにおけるメディアとジェンダー表象

— 『ライフ』誌が描いた女性たち

日大生産工 平塚博子

1 まえがき

本報告では、戦中戦後を通じてアメリカで最も影響力のあったメディアのひとつであった写真週刊誌『ライフ』を取り上げ、戦後から冷戦初期にかけてのジェンダー表象を、女性の表象に着目しながら検証する。この時期の『ライフ』をみていくと、その女性表象が伝統的な「女らしさ」を強調しながら、当時のアメリカ社会が抱える様々な矛盾を露呈していることがわかる。この時期の『ライフ』の女性表象を人種や民族の問題と絡めて見ていくことで、冷戦初期のアメリカと『ライフ』にみられたジェンダー規範における伝統回帰の意味を検証する。さらには、この時代の60年代以降のフェミニズム運動への影響なども併せて考察してみたい。

1. 第2次世界大戦中時のアメリカにおけるジェンダー規範の揺らぎと『ライフ』のジェンダー表象

第2次世界大戦はアメリカにとって武力、経済力、メディアのすべてを用いて戦う総力戦であり、深刻な労働力不足という問題を受けて、政府は従来男性領域とされてきた領域での女性の労働力の動員を迫られることとなる。メディアが戦時の新しい女性のイメージ作りに大きな影響力を持つものと考えた政府は、戦時中様々なメディアに協力を要請し、多くのメディアがそれに応じた。

戦中、アメリカの女性たちは妻や母として家庭を守るだけでなく、軍需生産はもちろん軍の要員としても動員され、労働力として戦時下のアメリカ社会の中で大きな役割を果たすこととなる。第二次世界大戦は、アメリカ人女性の社会進出促すと同時に、アメリカ社会における伝統的な「女らしさ」の概念に修正を迫る契機となった。

しかし、こうした女性の社会進出やジェン

ダー秩序の揺らぎはあくまで戦時という非常時の期間限定的なもので、戦争終結が近くなるとアメリカ社会は伝統的なジェンダー規範に回帰する。この時期の『ライフ』を含めたメディアも、「女性の社会進出は一次的なものであり、戦争という非常時が終われば女性は家庭に帰る」という政府のプロパガンダを踏襲し、女性表象において母性や家庭性を強調するものが目立つようになる。

2. 戦後の『ライフ』における伝統的なジェンダー規範への回帰

戦争が終結し冷戦期に入るとアメリカ社会全体とメディアにおけるこうした伝統的なジェンダー規範回帰の動きはさらに加速する。『ライフ』の表紙における女性表象の画一化を見てもそのことは明らかである。戦中、特に戦況がまだ安定しなかった時期の『ライフ』に回数こそ多くないにせよ、軍人女性や従軍看護婦さらには軍需工場で働く女性など様々なタイプの職業に従事するが登場していた。しかし、終戦からトルーマン政権1期の1年半あまりの間だけに限っても、登場する女性は女優やモデルやアスリートといった美を強調する女性たちに限られ、軍事関係を含めた職業で活躍する女性が表紙に登場することはない。記事においてもミスアメリカコンテストを伝える記事など表紙同様に美を強調するものや、理想の住宅で最新式の台所に立つ女性を伝えるものなど家庭性を強調したものが目立つ。

3. 『ライフ』におけるジェンダー表象と冷戦期アメリカのリベラリズムが抱える矛盾

一方で、この時期の『ライフ』の女性表象

The gender representations in American media during the early Cold War era:
Women in *Life* magazine

Hiroko HIRATSUKA

を人種と民族という問題と絡めて考察していくと、伝統的なジェンダー規範への回帰や保守化とは別の側面がみえてくる。つまり、この時期の『ライフ』の女性表象は、アメリカのリベラリズムを構築する人種とジェンダーそして民族の言説に働く複雑な力学とその矛盾を陰画的に映し出しているのだ。

冷戦の時代に突入すると同時にアメリカは西側諸国のリーダーとして、アジアやヨーロッパやアフリカそして南米諸国における民主化と反共産主義政権の樹立に積極的に介入していくこととなる。国内においても、戦争協力によって社会での存在感を増したアフリカ系の人々による公民権運動がついに本格化してくる。この時期の『ライフ』も国内外のこうした民主化の動きを積極的に紹介している。この時期の『ライフ』は、日本での占領政策やインドネシアなど旧植民地諸国での独立の動き、南部で活発化してきた公民権運動や人種間の衝突を頻繁に報じている。

国内外で民主主義を称揚しながら、男女間の関係に関しては伝統的な規範を求めるアメリカ社会全体とその流れに追従するこの時期の『ライフ』の女性表象は、アメリカのリベラリズム言説の根底に流れるセクシズムと矛盾を陰画的に映し出す。

さらに、この時期の『ライフ』の民族表象特に日本女性の表象を見ていくと、アメリカ女性の表象と興味深い対称関係を構築している。占領期の『ライフ』は、米兵によって民主化されていく日本女性を紹介する一方で、芸者などを取り上げながら日本女性を伝統や慣習と結びつけて報じている。こうした傾向は、冷戦期のアメリカメディアに流行した冷戦オリエンタリズムの流れの中でも捉えることができよう。この時期の『ライフ』は、最新のファッションに身をつつみ、最新式の住宅の最新式のキッチンに囲まれて暮らすアメリカの女性たちを報じる一方で、伝統的で慣習に縛られた日本女性たちを報じているのだ。『ライフ』におけるこうした日本女性像は、冷戦期アメリカのジェンダー規範における保守化を曖昧化しつつ、アメリカ女性を自由で解放された女性として再提示する。それと同時に、「さらに伝統的」で「さらに保守的」な社会を生きる女性たちを措定することで日々強化され続けなければならない冷戦期アメリカのジェンダー規範の矛盾や歪を間接的に示唆しているとも読める。

5. まとめ

戦後、冷戦期のアメリカ社会はジェンダーにおいて表向きは伝統的な規範に回帰し、この時期の『ライフ』の保守的なジェンダー表象も社会のそうした流れにそうものだといえる。しかし、この時期のアメリカは「女性は家庭に帰れ」との流れがある一方で、戦後さらに加速化する女性の職業選択肢の多様化や消費社会の到来などによって、女性の労働意欲が強まり、男女間の労働条件には大きな開きがあるものの、既婚女性の就労者数は戦前より増加している。こうした事実は、戦中のアメリカの女性の社会進出の動きが、戦後になって全て停止したわけではないということ、さらには、アメリカ社会のジェンダー規範における本音とたてまえを示している。この時期の『ライフ』の中で、保守的であると同時に自由であるとして描かれる女性たちは、自由と民主主義を称揚する冷戦期アメリカにおけるジェンダー言説を強化すると同時に、その矛盾を転覆的に露呈する。このような意味で、この時期のアメリカと『ライフ』におけるジェンダー規範の保守化は、間接的な形ではあるにせよ、戦中と 60 年代アメリカに見られるジェンダー秩序のゆらぎとの連続性を示すものだといえよう。

「参考文献」

- 1) Andreson Karen. *Wartime Women: Sex Roles, Family Relations, and the Status of Women During World War II*. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1982. Print.
- 2) Feldstein, Ruth. *Motherhood in Black and White: Race and Sex in American Liberalism, 1930-1965*. Ithaca and London: Cornell UP, 2000.
- 3) Honey Maureen. *Creating Rosie the Riveter. Class, Gender, and the Propaganda during World War II*, Amherst, University of Massachusetts, 1984.
- 4) Hegarty, Marilyn E. *Victory Girls, Khaki-Wackies, and Patriotutes: the Regulation of Female Sexuality During World War II*. NY and London: NY UP, 2008.